

## フレイルに対する不安尺度作成の試み

川崎 悠丘

日本において健康寿命への関心は高くなっている。その中で、寝たきりや要介護状態と健康な状態の中間の状態として「フレイル」という概念が現在注目されている。健康に良い影響をもたらす健康行動に人を向かわせるヘルスプロモーションの研究がある。その介入方法は理論により様々であるが、介入により対象者の気持ちを健康的な状態に接近したいと思わせ、不健康な状態を回避したいと思わせるという点で共通している。また、健康行動に関する実態調査によると、年齢が上がるほど健康行動に取り組む人、不安の内容が自身の健康や病気である人の割合が増えている。以上のことから高齢になるほど寝たきりや要介護状態に対する不安が増え、それが健康行動の要因となっていると想定される。しかし、この不安についての明確な定義は現在定められていない。フレイルの概念が具体的な寝たきりや要介護状態に対する不安の具体的な事柄に繋がると考えられる。よって、フレイルに対する不安尺度を作成することで、寝たきりや要介護状態に対する不安の定義を検討する。

本研究では20代～70代の600人を対象に調査を行った。質問項目は作成したフレイルに対する不安尺度項目29項目、TIPI-J、健康行動の実施に関する2種類の質問項目、基本属性として年齢、性別、子どもの有無、結婚、主観的健康状態、同居者の種別、現在かかっている病気について尋ねた。分析の結果、尺度項目は18項目となり、想定されていたものとは異なる2因子構造が確認され、下位因子を社会・心理的不安と認知・身体的不安と命名した。このことからフレイルに対する不安は体と心のネガティブな変化に対する不安が構成要素であると考えられる。しかし、口腔機能の低下に関する項目が全て脱落したため、口腔機能の低下に関する項目は今後さらなる研究が必要となる。また、健康行動との相関は一部年代性別のみで確認されたが、グループによって相関の正負が異なることから、こちらもさらなる検討が必要である。基本属性との関連についてもフレイルに対する不安に影響を及ぼすものがいくつか確認されたので、尺度が完成した際に詳しい検討の余地が考えられる。(臨床死生学・老年行動学)